

特42

456

訂正
觀世流
諸家
卷之七

七
琴
流

68

七詩落

以筆意一二一二一二一二一二一二一二



才ハ捨小舟うらまてもく甲斐

寺也うらまて是ハ其詩依

頼釣とハ秋子也。楓之暇白石橋山

乃本歎ハ味方うらまて。解ハ主勢

よハ程ハ先安房上総乃方入也

如才也ハ存ハ乃ハ去肥ハのハ次郎



書

あつり河傳乃天板と後きり
 一番よ八田代殿 柵二妻よ志七の
 乃次郎 三番よ去屋乃良
 四番よ去佐房五妻よ久 六平公去
 妻よ八 同 八遠平 子板よ六
 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十
 龍門原上け去は屍とてさ

まをたれ くらあし 命外行きとえ
 らひ出まじし 所もれ 空平思の
 糸面 たるりつり 夢さく ねた
 年行さく 夢さく 夢さく 夢さく
 長てのりて 国崎殿よ 夢さく 夢
 たり 沖たつて 行よ 妻よ 出母
 あつり 中く ねた 智

なれば我君よこそせよと云ふは
も謂ひ候 事々々々。昭石
橋山乃今我子。子々々々。作作
田丸と一義忠の副將軍と云ふは
侯野を組ぐ討事ありけれ親子
と一様二つ乃命あり也。見や去
肥後と云ふは母の親子と云ふは
親也

ごさし物づく喜平をお坊を如き平
さ致してこぬとあるは親子の口一
人あり候。なまは候。御道
程は物あり候。いそ。喜平。君よ
皇の御親也。有と。意と。侍子
よりあり候。行と。侍子より候
まよと。行り。中と。子と。長と

あり候へ老平遠年知るるは君乃御
 ち子よたじり。報より芳四りて
 御母よりあり候へ老平可レは
 事さす者小君乃は為父の命に
 へ老平あり候へ。御母よりあり候へ
 候へ老平君の命は父の命を
 言老平へ老平あり候へ。御母よりあり候へ

語道断乃り申さるるは君乃は
 為父の命を及そむくはあり候へ
 事さす者小君乃は為父の命を
 へ老平あり候へ。御母よりあり候へ
 候へ老平君の命は父の命を
 言老平へ老平あり候へ。御母よりあり候へ

てあつたを平と可よ討死せ
たやとわうれて死にらさうのよ
子の別を義ありまおしく
張月北西乃を行旅定めの舟路
うれラカシ仲ある波のきましも討死
る急うとせうりキ上也甲あまはた
たのらば時并めて首まて名も下舟

漕舟の長たる高のらるあまよ
長船一艘みして人を出てあつた
あまよとらうまおらう甲あ
作テらふあれおらふひたかる
た系跡あまよ甲あ
の船はひあやと思ふもよ
あつたあまよあまよ甲あ

刀多し中が極すうやれ舟と成
てその舟は舟と行と書るを清
舟と清座あるや 沙ん候
^早言語道断の中うゝ物は我味方
とて思ひて。日日も頼むに朝
よの船申上り命有くを待たむ
ててく自害よ及んと腰の刀よ

とめくはあゝ物書は公舟と座
^早行と書るは舟と座と也
中くの舟 俵のきて加極よの
そ 是くを戯事とて候事
陸ゆう海ゆうを舟と書るれ
く清舟と書るは舟と書る
は對面あり候事と書る

龍井馬の飛てあり。年々好新。
 子母の母鹿よりきき。是は正徳
 しくまのふらふら。海へ出肥の子義
 夢の夢の者さくふそ 下 町家百程
 世の社の縁今乃所物語をよ
 くの落渡はりて命をゆそ人く不
 笑の面や思さし 下 去なるくう新

夢のなきさく竹うまし唐
 衣類のあふれよゆのきり月乃益
 さらくまの 下 後たよ 上 後身の 上 色
 此酒まの那 下 くらき年。知子目出
 名おあれたびん 上 所舞人 下 出
 及そと舞り 上 地 下 舞
 酒家 下 舞 上 舞 下 舞 上 舞 下 舞

三國志の巻をせし事其の序に
 一 御覽二十萬騎より上給ひ
 一 花に在るに治め給ふ事其の
 一 のがたきことめも子年より
 一 一 忠勅乃道より於宮に
 一 一 志に忠をんれみらよる也
 一 乃家と久く色

右之本者觀世大夫織部以章句
 真本令放行畢

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二条通御幸町西江入町

山本長兵衛



明治廿六年二月十七日印刷
 明治廿六年二月同日訂正出版
 明治廿六年三月廿九日別製本御届

定價三錢五厘

東京市麹町區飯田町四丁目壹番地
 宮内省御用達

訂正者 觀世清廉

板權 所有

發行所 京都市上京區二条通御幸町西
 兼印刷者 檜常之助



